

初校	再校	三校	念校	責了	責了2
張	張				
D	D				

再校

エッセイ◆私と『資本論』
自然順応型経済への転換を
 晩期マルクスの魅力
 藤岡 惇



地球が温暖化局面に入ってから1万年余り。この間に大量の水が溶け、60%も海面が上昇。氷河はフィヨルドに変わり、陸地は大きく縮小した。加えて数十年前から、人間の行為によって温暖化が加速し、「気候危機」を激化させている。

昨年末に、中国武漢の地で新型コロナウイルスが出現し、動物界から侵入する事件が起きた。発生源については、食用野生動物からの侵入説、ウイルス研究施設からの流出説などがあり、論争中だ。いずれにせよ自己免疫力を高める以外の治療策がないため、地球規模に拡散。「パンデミック危機」は世界を麻痺させつつある。

二つの危機の共通項は何か。利潤第一主義の資本主義文明にたいして、自然界が発した警告であり、復讐ではないだろうか。とすれば危機からの出口はどこにあるのか。

世の中には2種類の財——人が生み出す財と人を生み出す財があり、両者は根本的に異なることの自覚から始めるべきではないか。市場で取引される財の大半は前者だが、大地・自然、食料、ケア・教育・公衆衛生、信頼の文化など、「コモンズ」と呼ばれる財は後者だ。「お釈迦さんの掌で踊る

孫悟空」の寓話を使うと、後者は「掌」にあたる部分。乱費すると、人の生命力の根源を損なってしまう。

とともに私たちの心身を自然順応型に変え、免疫力を高めることだ。狩猟採取の時代のように、毎日10⁴は山野を軽やかに駆け巡りたい。そのうえで、どんな弱者も独りぼっちにさせない「心の通いあう共同体」を再建することではないか。

私は若い頃、神経症に陥り、頭で体を酷使してきた。その私が72歳まで生きられたのはなぜか。45年前に基礎経済科学研究所が開設した「自由大学院」と出会い、暴走する頭脳を肉体と自然に埋め戻す道が開けたことが大きい。学位も試験もないこのフリースクールの魅力は何だったか。場末の庶民と職業研究志望者の卵（大学院生）が集い、読書会を行い、庶民の当事者リサーチを支援する。そのなかで心身ともに爽快になった。

私の参加する「エコロジカルな人間発達を考える」ゼミは、45年間に700回の読書会を行った。なかでも『資本論』を読破した経験が印象に残る。

かつて「ボルシェビズム」（マルクス・レーニン主義）と呼ばれた潮流があった。軍隊的な規律にもとづく党を築けば、資本主義が未発達な地域でも、資本主義を越える理想社会を築くことができる、と説く潮流であった。私たちのゼミは、これに拘束されずに、もっと自由になろうとした。この方針が私たちを救ったと思う。

『新版 資本論』が刊行されたこともあり、再読したいという声が出ている。そのばあい、次の二つの著作を参考書としてはどうかと思案中だ。一つは、不破哲三『マルクス弁証法観の進化を探る——『資本論』と諸草稿から』（2020年、新日本出版社）だ。

「一般・特殊・個別」という弁証法の論理に基づいて、『資本論』は厳密に組み立てられていると説く人が、私の周辺には多かった。しかし、弁証法の最大の魅力とは、「正—反—合」（最初の「正の高次復活」という「否定の否定」のダイナミクスを説明しているはず。先の論理だけでは、未来社会への移行の構図が浮き上がってこないという違和感を、私は拭えなかった。

私の疑問に答えて、不破さんは、次のように説く。「1857—58年草稿」の段階までは、「一般」「特殊」「個別」というヘーゲル流の「論理枠組み」で、叙述を展開しようとしてマルクスは苦労したが、うまく現実を説明できずにきた。1860年代以降、対象を経済から政治と社会、そして自然の領域まで広げて労働者の自治主体の形成という政治と社会要因から説明するように視野を広げた。おかげで「正—反—合」という「発展と没落の弁証法」を用いて、未来社会への移行の蓋然性を説けるようになったとする。マルクスの歴史探究はその後も続き、晩年期に入ると、原始共産制社会、大地の荒廃、気候危機といったエコロジー問題にも視野は広がったという。

二つ目の参考書は、マルクス・ガブリエルら3人の欧米の優れた理論家とともに、斎藤幸平さんが編んだ『未来への大分岐——資本主義の終わりか、人間の終焉か？』（集英社新書）だ。32歳の斎藤さんは、大地・自然、文化、社会信頼を「コモン（ズ）」として重視し、その共同管理の技量の向上、住民の自治主体の成長を軸にした未来社会論を展開しており、将来が楽しみだ。

1927年に盛岡中学校を卒業した教え子たちに宮沢賢治は、こう呼びかけた。「新たな時代のマルクスよ。（資本の）盲目的衝動から動く世界を素晴らしく美しい構成に変へよ」と。

「新たな時代のマルクス」をめざす若い世代に注文したい。当時の時代制約があり、マルクスは、『資本論』を「商品と貨幣」の分析から始めたが、このことが、近代資本主義の発展と没落、原始共産制への高次復帰という壮大な構図を描く上で、マイナスとなったことは否定できない。やはり137億年前に素粒子と水素原子を生み出したビッグバンから、「経済学批判」は始めるべきではなかったか。悠久の宇宙における生命の流れから説き起こす経済学、「アニミズム（弁証法）的唯物論」を基盤とする経済学を創ってほしい。

なお関心のある方は、拙稿「帰らん、いざ豊稷の大地と海へ」（私のホームページ <http://eco-economy.ever.jp/wp/>）に収録）を読んでいただきたいと願う。
 （ふじおか あつし・立命館大学授業担当講師）

はすえ